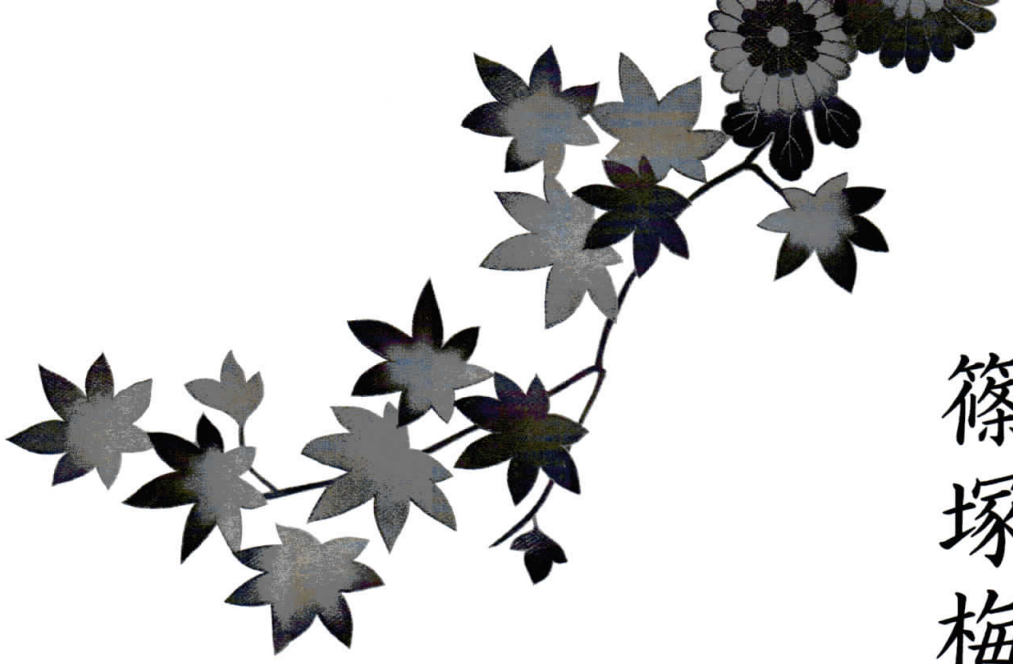


地歌舞

篠塚梅文三　舞の会

ごあいさつ

出会うものすべてが美しい秋と成ります。
皆さまには、おすこやかにお過ごしの事と存じます。
さて、この度は、梅文三舞の会も第十五回目と成りまして、
ここ冬青庵の美しい紅葉のお庭を眺め乍ら迎えられました事は、大変うれしくありがたく、
これもひとえにお世話頂きます皆さま、そして大きな力をくださる地方の先生方、
そしていつもいつもご支援下さる皆さまあってのことと心よりお礼申し上げます。
又この度は、西川流の西川千景が賛助出演して頂きます。
なおいっそう華やいだ会に成ります事と楽しみに致して居ります。
この日の為に出演者一同いっしょうけんめい精進致して参りました。
いっ時ではございますがごゆっくりご鑑賞下さいますようお願い申し上げます。
ありがとうございました。

番組

地歌　ひなぶり

舞　篠塚梅文三
歌三絃　菊原光治
胡弓　菊萌文子

解説　茨木屋要助作詞、八百六伊八作曲。
大阪の南地五花街のうちの有名な島の内の廓へ通う駕籠かきを題材とした端歌もの。芝居でも上方の廓の場ではよく下座音楽として使われる、はなやかな廓の送り迎えの軽やかな足どりに心浮き立つ風情の曲。

上方唄　姫三社

舞　中谷美奈子
小竹桃瑚
歌三絃　倉橋文子
尺八　倉橋容堂

解説　大阪の歌舞伎の顔見せでは本狂言が始まる前に祝儀物として「三番叟」と三社が演じられました。その頃は「三社物」として様々な種類の歌があったようですが、現在まで伝わっているのは女舞の「姫三社」と男舞の「男三社」の二つだけです。明るく賑やかな曲。

地歌

八島

西川流

舞 西川千景

歌三絃 菊原光治

箏 菊萌文子

解説

謡曲「八島」から出たものである。西国行脚の僧が四国の八島で漁翁の姿で現れた義経の霊に逢い、八島の軍（いくさ）物語を聞くが、夜の明けるとともにその姿は消え失せたと云う曲である。能そのままの軍物語で、長刀や二枚扇での勇戦の様を見せ、弓を引く型や長刀を打つ激しい型も有る。西川流では長刀は持たず扇で見せるものです。そして能のごとく義経の霊は消え、僧の夢がさめて松風ばかりが残るので有る。

演奏

神保三谷

尺八 倉橋容堂

解説

越後国南蒲原郡下田村（現在の新潟県三条市下田）に有った明暗寺という虚無僧寺で伝承された「三谷」という曲を明治28年、同寺の最後の虚無僧であった神保政之助が手を加え芸術作品として編曲したもの。「三谷」とは意味不明であるが、観世音菩薩を讃える梵語に由来するという説や深山幽谷を意味するという説などがある。

地歌

石橋

舞 篠塚梅文三

歌三絃 菊原光治

箏 菊萌文子

解説

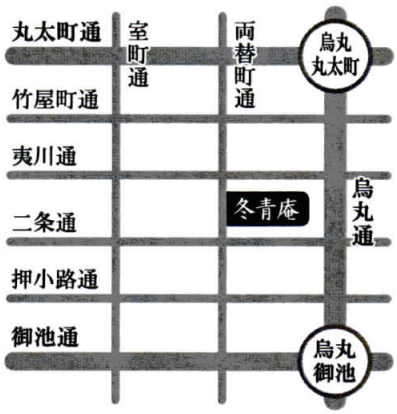
瀬川路考作詞、芳沢金七・岩村藤四郎作曲。初代瀬川菊之丞が謡曲「石橋」から材を得て所演したと伝えられる芝居歌もの。歌詞、曲調ともに又終始三下りで返している点でも長唄「英執着獅子」と相似している。前段は牡丹が咲き乱れる初夏の景色と胡蝶が花に戯れ遊ぶ様に思い迷う女心を情緒的に描写し、後段では舞楽の曲をめでたく舞い納め千秋楽となる。

千秋楽

会場へのご案内

冬青庵（とうせいあん） 能舞台

（〇七五）二四一ー二二一五



平成二十八年十一月二十三日（水・祝）

於 冬青庵 能舞台

開場 午後四時三十分　開演 午後五時

お問合せ 花の会（〇七五）六二二ー五六五一

賛助出演

西川流　西川千景

尺八　倉橋容堂

歌三絃　倉橋文子

地方

歌三絃　菊原光治

箏・胡弓　菊萌文子

スタッフ

衣裳着付　伊東功男

髪　小野加月美

化粧　清末侑子

衣裳製作　染織工芸平文

平田靖雄

音響・照明　アート・ステージ

アート・グラフィック　櫻井真知子

司会　詩人 小沢真奈